

生物多様性保全と地域づくりを目指した多様な主体による1万haの国有林管理

～赤谷プロジェクト～

公益財団法人 日本自然保護協会 藤田卓

1. 赤谷プロジェクトの概要と特徴

首都圏の水源にあたる利根川上流部、群馬県みなかみ町に位置する「赤谷の森」と呼ばれる1万ha、山手線内側の約1.6倍に相当する広大な国有林がある。この森では、地域住民から組織された地域協議会・林野庁・NGO（日本自然保護協会）が協力して、これまでの木材生産を中心とした森林管理から転換し、生物多様性を保管理するとともに、持続的な地域づくりを目指した森林管理を進める「赤谷プロジェクト」が2004年から開始され今年で9年目を迎えた。このプロジェクトの特徴は、下記の3つである。

2. 森の生物多様性の現状評価に基づく生物多様性保全型の森林計画の策定

1つ目の特徴は、森の生物多様性を保管理するために、この森に生息する猛禽類や哺乳類、植生などを指標としてモニタリングし、森の生態系の現状評価を行い、これらの成果を国有林の5カ年の管理計画（地域管理経営計画）に反映させることである。この森に生息する猛禽類や哺乳類、植生などを指標としてモニタリングした結果、森の健全さを指標するイヌワシ、クマタカの繁殖成績は良好であること、本州中部に分布するほ乳類はほぼ全て生息し、シカなど大型ほ乳類の摂食が過剰ではないなど、赤谷の森の生態系はおおむね良好と判断された。一方で、以前は山奥でしか見られなかったニホンザルが人里に出没して農作物被害があったり、防災上必要とされ設置された治山ダムがイワナやカワネズミの生息する溪流の連続性を分断するなど、課題が浮かび上がってきた。また、今後赤谷の森の生態系へ及ぼす新たな脅威として、従来生息していなかったニホンジカの分布拡大（図1）、アライグマなどの外来生物の侵入、ナラ枯れによる生態系の攪乱（堅果類の減少によってほ乳類が里地へ進出する等）などが想定された。これらの課題を踏まえて望ましい森林の将来像は、“本来あるべき生態系をもつ自然林”とし、2011年には、約2900haあるスギやカラマツなどの人工林の約3分の2（約2000ha）を自然林に復元することを明記した全国初の生物多様性保全型の管理計画を策定した（日本自然保護協会2011）。

しかし、生物多様性保全型の森林管理は前例がなく、その手法は確立されていない。そのため、赤谷の森で実施する事業は、その時点で最も良いと考えられる手法を実行し、事業の途中段階で様々な調査結果を検証しながら、管理手法を見直す「順応的管理」の考え方に従い実行することとしている（例えば、全国初の治山ダム中央部撤去など（図2））。

3. 地域の声を森林の管理に活かす

2つ目の特徴は、国有林の管理を、地域協議会、林野庁関東森林管理局、日本自然保護協会の3者で決定する意思決定の仕組みを作ったこと。さらに住民参加によって国有林の管理計画を策定したこと。計画の初期段階から住民が参加し、国有林の管理計画を策定した全国初の取り組みである。市民参加によって、地域の水源の保全や、エコツーリズムの推進、外来生物の侵入防止やナラ枯れ・農林業被害対策のために周辺の民有地・公有地との連携などが新たに盛り込まれた。また、地域づくりの活動として、上杉謙信が関東遠征の際に利用するなど歴史があり、観光の目玉の1つである旧三国街道のマップづくりを進めている

4. 多様な主体によるモニタリング活動

3つ目の特徴は、プロジェクトの活動は、関係者の教育機会として位置づけられていること。例えば、調査研究活動は、専門家だけでなく、地域住民、ボランティアサポーター、林野庁職員、自

自然保護協会職員などの様々な主体が参加するような工夫が織り込まれている。たとえば、毎月第1週目の週末を「赤谷の日」と名づけ、プロジェクト関係者やボランティアサポーター（登録者約60名）による作業日にしていて、毎月約20名が活動に参加している。赤谷の日は、いきもの村をプロジェクトの拠点とするための整備作業をするとともに、生き物を調べたり（テンの糞から食性を探る、木の実の豊凶調査、湿地のモニタリングと保全活動など）、赤谷の土地に育まれた伝統技術（炭焼き、かんじ作りなど）をみんなで学ぶ場として活用している。また、地域の水源の森（ムタコ沢流域）において、市民が参加して間伐を進めたり、水質を調べたりするなど、「将来にわたっておいしい水を飲む」ため、地域協議会が主体となった定期的な活動「ムタコの日」も行われている。

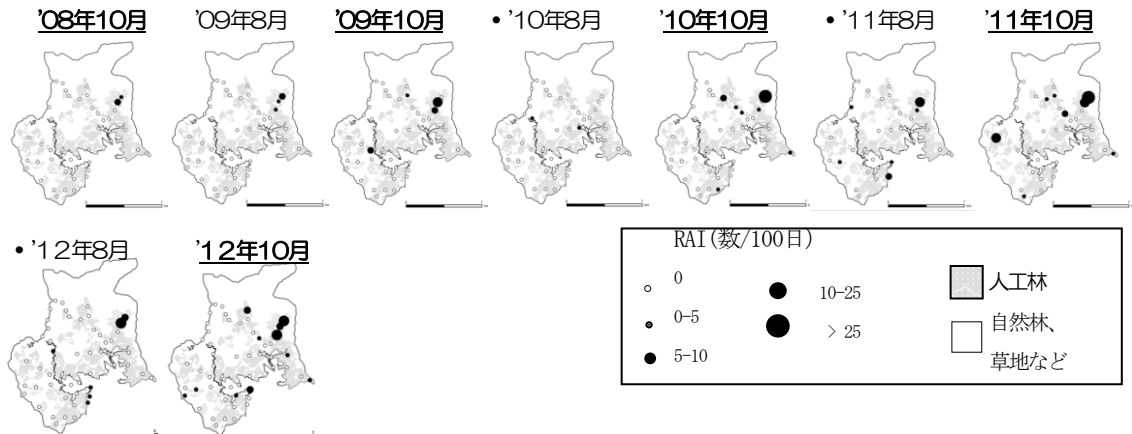


図1 カメラトラップに基づくニホンジカの出現頻度（撮影頻度指数*；100日あたり）の経年変化



図2. 全国初、防災と溪流環境復元のための治山ダム中央部撤去（2009年実施）

既存の治山ダムの中央部を撤去した事例は全国初であり、これに伴う土砂流出や、生物多様性に与える影響（溪流に特有のイワナなどの魚類、水生昆虫、カワネズミ、溪畔林など）を調査したデータに基づき、防災と溪流環境復元の両立を可能にする治山事業についての研究を進めている。

赤谷プロジェクトのエッセンスが詰まった「赤谷の日」に参加してみませんか？プロジェクトに興味のある方はどなたでも参加できます。参加希望の方は総合事務局（akaya@nacs.j.or.jp）までご連絡下さい。

